“The Fire and the Hearth” にみる人種と家系の問題

内　田　智　子

I　“The Fire and the Hearth” の位置づけ

William Faulkner が1942年に発表した「長編小説」*Go Down, Moses* は，アメリカ南部という，人種間の軋轢を内蔵した舞台に於ける作者の人種観が最も窺える作品の一つである。これは，主に南部の白人家庭 McCaslin 家に関するいくつかの短編に，作者が手を加えてまとめ上げたものである。そのため，『行け，モーセ』を構成する，それぞれタイトルの付けられた七つの話は，マッキャスリン家に関しておのおのがその背景を物語る完結したものとなっている。そして，その二つ目，“The Fire and the Hearth” では，人種問題の絡む近親相姦の結果が大きくクローズアップされていて，この作品は，『行け，モーセ』の中でも “The Bear” と並んで，人種の問題を探る上で重要なものとなっているのである。本稿では，この作品に見られる「人種」と「男系」「女系」といった家系の問題を検討し，フォークナー作品に於ける南部世界の価値観の一端を明らかにしたい。

II　概　　要

1. 『行け，モーセ』全体にわたる概要

この小説の舞台は，主として南北戦争を挟んで幾世代にも渡る，白人の

マッキャスリン家，Edmonds 家，および黒人の Beauchamp 家である。これらの家全部の共通の父祖となっているのは，白人 Lucius Quintus Carothers McCaslin で，彼は，マッキャスリン農場の初代の当主であるのだが，自分の黒人奴隷 Eunice と関係を持つに至り，さらに彼らの間に生まれた混血の娘 Tomasina とも近親相姦を犯して息子 Terrel（通称 Tomey's Turl）をもうける。さて，当時のアメリカ南部では，男性と女性の差別は言うに及ばず，支配階級白人と，隷属状態にある黒人の差別も厳しく，たとえ自分の子供であっても，黒人の血が混じれば息子や娘というよりは，奴隷と扱うのが通常であった。そこで，この小説では，マッキャスリン家の「男系の」子孫であるにもかかわらず，黒人故に隷属状態にあり，白人家庭に仕えるビーチャム家の人々，つまりテレルの子孫達が存在することになる。

一方白人の家系では，キャロザーズ・マッキャスリンの孫 Isaac McCaslin（マッキャスリン家の白人男系で従って「正当な」家督相続権があると目されている）が，祖父の近親相姦事件のことを知り，その忌まわしい舞台となった農場の相続を放棄する。アイザックには息子がないので，マッキャスリン家の財産は，キャロザーズ・マッキャスリンの娘の子孫，すなわちマッキャスリン家の，白人でありかつ「女系」であるエドモンズ家の人間に渡ることになる。「火と暖炉」に登場するのは，ビーチャム家の子孫 Lucius（通称 Lucas）Beauchamp とエドモンズ家の子孫，Carothers（通称 Roth）Edmonds である。

2. 「火と暖炉」の概要

「火と暖炉」の主人公ルーカス・ビーチャムは，実はマッキャスリン農場で働く小作人の顔の他に，密造酒売りの顔も持っている。密造酒売りの商売敵，George Wilkins のせいで密造酒製造が発覚するのを恐れ，蒸留器を隠すうち，彼は金貨を見つける。かつて埋められていたという噂の金貨の一枚かもしれないと，また探すことにする（ここでフォークナーの常套

手段である，クロノロジカルな時間の解体が起こり，舞台は突然43年前の回想場面となる)。

ルーカスは43年前，現在のマッキャスリン農場の主，ロス・エドモンズの父 Zack と決闘沙汰に及んだことがあった（実はルーカスとザックは同じ年齢で，二人が主従の関係によって離てられるまでは一緒に育てられていた。後にルーカスの息子ヘンリーとロスが7歳まで一緒に育てられたように)。ロスを産んでから彼の母は亡くなるが，ルーカスの妻 Molly は，ロスをとりあげに行った後，そのまま赤ん坊の世話のためにエドモンズ邸に留まる。ルーカスはザックが妻と姦通を行っていると思い，妻を取り戻しに行く（因みに実際はザックとモリーの間にはそのような関係はなかったようだ)。モリーは帰って来たが，赤ん坊のロスも一緒だった。ルーカスは今度はザックが息子を取り戻しに来るものと思い，待っていたが，ザックは来ない。そこでプライドを傷つけられたルーカスは剃刀を持ってザックの寝室に侵入する。ルーカスはザックのピストルを取って発砲しようとするが不発だった（このあたりは「火と暖炉」の元となった，雑誌に発表されていた短編 “A Point of Law,” “Gold Is Not Always”[1] にはない書き加えの部分の一つで，ルーカスに代表されるビーチャム家と，ロスに代表されるエドモンズ家の対立の深さを印象づける)。

物語はその後，また現在の時点に戻り，ルーカスは，ジョージ・ウィルキンズの密造酒の件をロスに密告し，ロスは，保安官に通報する。ジョージだけが捕まる筈だったが，翌日の明け方，彼が妻に起こされて目を覚ますと，裏庭に彼自身の密造酒製造の証拠品である蒸留器や瓶がある。ジョージと結婚する，彼の娘 Nat とジョージが運んできたものだった。保安官に見つかり，裁判所に行ったところ，ルーカスが，ジョージとナットが既に去年の秋結婚していたという証明書を出したので，身内を訴えることはできないという法律の故に，皆は無罪放免となる。しかし，二人の新居のベランダ修理と井戸掘りのための金を，ジョージはまたもや新しい蒸留器に使ってしまった。

ルーカスは金属を探り当てる300ドルの機械を若い白人のセールスマンから買おうとしたが，自分には銀行に3000ドルの貯金があるのに，まずロス・エドモンズに金を出させようとする。それに失敗すると，ルーカスはロスの騾馬を勝手に連れ出して，その騾馬と機械を交換すると言い出した。そこへロスが来て，騾馬を返せと言ったので，ルーカスはわざと50ドル分の銀貨を埋めておいてセールスマンに発見させ，「これから発見するであろう」金の半分と引き替えという条件で，まんまと機械を手に入れ，騾馬はロスに返す。さらにルーカスは機械を一日25ドルでセールスマンに貸す。

こんなある時，モリーがロスのところへ来て，金探しに凝ったルーカスと離婚したいと言う。それを聞きながら，ロスはキャロザーズ・マッキャスリンに端を発する，マッキャスリン家，エドモンズ家，ビーチャム家の歴史を思う。ルーカスは21歳になった時，キャロザーズ・マッキャスリンの残した金を受け取りに，キャロザーズ・マッキャスリンの孫アイザック・マッキャスリンの所に来た。それからルーカスは，結婚し子供を持つが，この子供ヘンリーとロス自身は，まるで兄弟のように一緒に育てられていたのであった。しかし7歳になった時，ロスは苦しみながらも白人として黒人との生活には区切りをつけるべきだと考える。その後のルーカスは売店から30年間もつけで買い続け，密造酒を売り，騾馬の詐欺事件を起こした末にモリーを悲しませている。ロスがルーカスの家に言って話をすると，ルーカスは金がかかるなら離婚はしない，週に2回しか機械は使わないと言うが本当であるとは思えない。するとある日曜日，モリーは町外れの泥の中で，機械を持ったまま倒れていた。ロスは二人を離婚させるべく，郡役所に連れて行き，離婚したら収穫の半分はモリーに渡すように言う。すると，ルーカスは離婚したくないと言いだした。そして例の機械をロスの所に持ってきたのであった。

Ⅲ　タイトル「火と暖炉」について

火と暖炉は「家庭的」な暖かさの象徴である。ルーカスとモリーが結婚した日，彼は暖炉に火を点したが，その火を彼らは生涯の間，燃え続けさせるのである。暖炉は炊事をする所でもあるので，自分たちで家事労働をせず黒人の使用人に任せる白人のエドモンズ家では大した重要性を持たない。子供の頃，白人ロス・エドモンズは，黒人の育ての母が煮炊きをする黒人の家の暖炉が大好きだった。自分の家の暖炉よりも好きだったと繰り返し記述されている。

> [There was]... the negro's house, the strong warm negro smell, the night-time hearth and the fire even in summer on it, which he [=Roth] still preferred to his own.[2]

Ⅳ　Race と Gender の問題

ところが，この短編世界では，フォークナーの他の作品同様，白人，黒人，男性，女性といった社会的な区別が設けられており，そのために人種，男女間で緊張状態が発生している。白人，黒人の区別に，男系，女系の区別が絡まっているので，例えばルーカスは，もし自分が黒人でなかったら，女系であるエドモンズ家の人間ではなく，男系である自分たちが土地を所有する筈だと思っている。ここには白人支配を認めながら女系を蔑む感情が見られる。以下は，モリーをザックの所から連れ戻す時に言ったルーカスの台詞である。

> "I'm a nigger," Lucas said. "But I'm a man too. I'm more than just a man. The same thing made my pappy that made

your grandmaw. I'm going to take her [=Molly] back." (pp. 46–47)

またこの作品では，女は男のプライドを賭けて「勝ち取る」ものとされ，家庭内の男性優位は白人黒人共通の認識となっている。

"I'm a man," Lucas said. "I'm the man here. I'm the one to say in my house, like you [=Zack] and your paw and his paw were the ones to say in his." (p. 116)

フォークナーの黒人ルーカスの描き方は，妻を連れ戻しに行くという葛藤の場面以外は，外観だけ，それも何を考えているのかわからない顔，といった表面上の描写に留まることが多い。ルーカスの顔は "the face which Edmonds saw was absolutely blank, impenetrable. Even the eyes appeared to have nothing behind them" (p. 69) とあって，白人男性であるフォークナーが，他の人種を描く際の限界を示しているのではないであろうか。葛藤や苦悩は白人男性だけに見られるものではない筈である。ルーカスは単純なトリックで人を騙そうとするなど，まるで子供であるかのように描かれている。[3]

V　人種差別についての作者の考え

人種差別の問題については，フォークナーは，自分に一番近い存在と思われる，白人男性のロスに託し，悲しむべき矛盾であると表明しているようである。最初，ロスとヘンリーは本物の兄弟のように寝食を共にしていた。

Even before he [=Roth] was out of infancy, the two houses

had become interchangeable: himself and his foster-brother [=Henry] sleeping on the same pallet in the white man's house or in the same bed in the negro's and eating of the same food at the same table in either.... (p. 107)

眠ることと食べることは生きていく上で欠かせない基本的な行為だけに，これを一緒に行うことは二人の一体感を強調することになる。ところがこの一種楽園的な状態は長続きしない。

Then one day the old curse of his fathers, the old haughty ancestral pride based not on any value but on an accident of geography, stemmed not from courage and honor but from wrong and shame, descended to him. (p. 107)

ロスがベッド，ヘンリーが藁布団で眠ることは，他でもない階級の差の象徴となっている。こうして，黒人の乳兄弟ヘンリーとロスは決別せざるを得なくなったのである。

フォークナーの別の作品，*Absalom, Absalom*!(1936) には，白人の主人サトペンと黒人奴隷との間に生まれた娘，Clytie が登場する。そしてクライティもまた，ルーカスやヘンリーと同じく，白人と一緒に育てられている。そして更にクライティは成長してからも，白人のサトペンの娘 Judith と一緒に暮らしている。ただサトペンは南部に生まれ育った人物ではなく，南部にはある時ハイチからやって来たという「よそ者」である。だから彼の黒人に対する態度は，南部人のそれとは微妙に違う。南部のコミュニティの概念をその批評の枠とし，[4] また南部白人の意見を代表すると見られる批評家，[5] Cleanth Brooks は，サトペンの白人の子供と混血の子供が一緒に育てられるのは異例のことであると述べている。黒人の血の

混じった子供が白人の子供と一緒に暮らすことが珍しかったとすれば，南部には実際，精神的な深い人種間の隔たりがあったということになる。

> Sutpen takes over the color bar almost without personal feeling. His attitude toward the Negro is further clarified by his attitude toward his other part-Negro child, Clytie. Mr. Compson once casually lets fall the remark that Sutpen's other children "Henry and Judith had grown up with a negro half sister of their own." The context of Mr. Compson's remarks makes it perfectly plain that Henry and Judith were well aware that Clytie was indeed their half-sister, and that Clytie was allowed to grow up in the house with them. This fact in itself suggests a lack of the usual Southern feeling about Negroes. Miss Rosa is much more typically Southern when she tells Quentin, with evident distaste, that Clytie and Judith sometimes slept in the same bed.[6]

サトペンはその精神的な人種間の隔たりを受け入れることをしない。支配階級の南部白人は，主人として黒人奴隷に君臨するが，一方で黒人には「主人として」優しく接することもある。差別の上に成り立つ優しさである。しかし，サトペンには，南部白人の立場から見れば「白人の主人としての優しさ」が欠けていたということではないであろうか。クライティはサトペンにとって，そのような複雑な感情の対象ではない。だから黒人の血の混じった妻は出世の邪魔になるから自動的に捨てる一方で，クライティは白人娘のジューディスの付き人の如く，家に置いているのではないのであろうか。そういうわけで，クライティについては，サトペンは図らずも南部の差別構造を飛び越える結果となったのである。

また，時代も下り1963年にもなって Martin Luther King, Jr. が行っ

た演説 "I Have a Dream" (Aug. 28, 1963) でも，白人と黒人が一緒にテーブルにつくこと，小さな子供でさえも兄弟のように手を取り合うことがいかに困難なことであるかが述べられている。

> I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slaveowners will be able to sit down together at the table of brotherhood....
>
> [O]ne day, right there in Alabama, little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls as sisters and brothers. I have a dream today![7]

このサトペンよりも「白人主人として」黒人に優しく接している人物が『行け，モーセ』には多数登場する。ザックとロスは黒人と共に幼年時のみ一緒に暮らしたが（当時の南部では珍しいことである），彼らは，差別の現実を目の前にして葛藤することのなかったサトペンとは少し違う。彼らの他，Miss Worsham の例を挙げよう。フォークナーはタイトルストーリーである "Go Down, Moses" の中でミス・ワーシャムという白人女性と黒人女性モリーの友情を描いている。ミス・ワーシャムは "We [= Miss Worsham and Molly] grew up as sisters would." (p. 357) と言い，北部でリンチにあい亡くなったモリーの孫の遺体を，故郷に帰らせようと尽力する。同じ人間ながらも，主従に分かれるのだから真の平等とはいえない当時の社会的コンテキストの中でではあったが，白人は黒人との連帯を試みる。白人の先祖の犯した罪，すなわち，白人が自分の地位にものをいわせて黒人に損害を与えたという実態の歴史は，こうして後の白人，黒人の苦難によって贖われている，とフォークナーは『行け，モーセ』に於て描いているのである。

VI 白人の立場

そしてまた，この白人対黒人の図式は，必ずしも白人側が一方的に支配，搾取し，黒人側が被支配，搾取される側に立つという単純なものではない。白人でありながらも女系，黒人でありながらも男系という，人種とジェンダーに於ける二つの差別の錯綜は，そのまま白人の相続を複雑かつ葛藤に満ちたものにしている。[8] 白人男性であるロスにも様々な困難がある。彼は，白人の優位性と共に，女系であることにより生ずる引け目も感じながら支配者の役割を演じなくてはならない。マッキャスリン農場を受け継ぐ者は，その莫大な財産と共に，この社会的差別の矛盾，葛藤も引き受けることになるわけである。白人男性であるフォークナーが，黒人や女性の立場に立つことは難しく，従ってこれらの人々の描き方が十分であったとは言えないかもしれないが，一方彼と同じ立場の白人男性の葛藤については，余すところなく描くことができる。そういうわけで，フォークナーは一見，罪と恥辱にまみれたマッキャスリン農場の相続を放棄するアイク・マッキャスリンは，一種の救いをもたらす存在（彼は「熊」に於てイエス・キリストと同じ大工になるなど，キリストになぞらえられている）であるかのように見えるけれども，実はこの放棄も現実からの逃避であると，いとこの McCaslin Edmonds に言わせている。その一方，ロスは，混血の愛人を捨て，これまた悪人のように見えるけれども，この南部という設定で，自分の力ではどうしようもない相続の荷物を背負わされた結果の致し方のない選択であったとも述べているようである。[9]

フォークナー自身の，黒人・女性に対する認識は十分であったとは言い難いが，時代，環境の制約を受けながらも現状を変えてみたいという考えはあった。例えば先に見た，ミス・ワーシャムとモリーの友情の他，モリーを巡るザックとルーカスの争いは，女が男のプライドをかけて獲得されるもの，と言う認識に基づいて行われていたが，少なくとも白人と黒人

が等しい土壌で争うというものではあった。

Ⅶ　解放への道のり

タイトルにもなった Negro spiritual の "Go Down, Moses" は，同じく隷属状態にあったかつてのイスラエルの民に自分たちをだぶらせたアメリカ黒人奴隷の霊歌である。イスラエルの民がエジプトを逃れ，解放されてカナンに帰ったように，奴隷たちはつらい労働に耐えながら，いつか自分たちも解放され，自由の身になることを願って歌っていた向きもあるようである。[10] このタイトルにも，フォークナーの黒人解放への祈りが込められている。

フォークナー自身は，既成の宗教的信条には必ずしも賛成でなかったが，聖書の枠を借りて，自分なりのヨクナパトーファ年代記を書いた。フォークナーなりの神，罪からの解放への願い，民の歴史がある。フォークナーの悲劇性は，既成教条による救いが難しいということにある。「エジプトに売られた」モリーの孫は，死んでヨクナパトーファというカナンに帰る。これがフォークナーの小説世界の一局面である。フォークナーの小説中の，エジプトに売られた民は，モーセに導かれて解放されるのであろうか。そもそも，この小説には，メシヤ的人物（アイク・マッキャスリン）が登場してもその力は贖いをもたらすにはあまりにも消極的だし，モーセ的な指導者も見当たらない。しかしこの現代の救い難さ，救いに至る道のりの困難さの描写にこそ，フォークナーの力点があると言えるのではないであろうか。

Notes

1　この二つの短編は，Joseph Blotner, ed. *Uncollected Stories of William Faulkner* (1979; rpt. New York: Vintage, 1981) に収録されている。そのほか，「火と暖炉」の元になった，出版されなかったもう一つの短

編の存在も知られている。Cf. David Paul Ragan, "The Evolution of Roth Edmonds in *Go Down, Moses,*" *Mississippi Quarterly*, 38 (1985), 295–309. ラガンは次のように述べている。"Carothers Edmonds first appears in "The Fire and the Hearth," which incorporates, with extensive revision and additions, three stories: "A Point of Law," published in *Collier's*, June 22, 1941; "Gold Is Not Always," which appeared in *Atlantic*, November 1940; and "An Absolution" (also entitled "Apotheosis"), later revised to form the story "The Fire on the Hearth," which remained unpublished" (p. 296).

2 William Faulkner, *Go Down, Moses* (1942; rpt. New York: Vintage, 1990), p. 107. 以後，この作品からの引用は本文中に示す。

3 Cf. Myra Jehlen, *Class and Character in Faulkner's South* (New York: Columbia UP, 1976), p. 122. ジェレンはこのように述べている。"[W]hen we do enter Lucas' mind, as in the first section of "The Fire and the Hearth," we witness only the foolishness about the whiskey still or his silly dream of buried gold. And when Lucas speaks directly he sounds no different, only perhaps more impudent, than the stereotype of a very shrewd but ultimately child-like darky."

4 彼の *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (1963; rpt. New York: Yale UP, 1966) には，このコミュニティの概念を基にしたフォークナー作品の解釈が展開されている。

5 Arthur Kinney は，ブルックスのことを "a sensitive and knowledgeable Southerner" と呼んでいる。Kinney, *Go Down, Moses: The Miscegenation of Time* (New York: Twayne, 1996), p. 166. 『アブサロム』の中のクライティの扱いに関する *Yoknapatawpha Country* の解釈には，彼の南部人としての洞察の深さが伺える。

6 Brooks, p. 299.

7 James Melvin Washington, ed., *A Testament of Hope: The Essential Writings of Martin Luther King, Jr.* (San Francisco: Harper, 1986), p. 219.

8 Cf. Kinney, p. 114.

9 Cf. Ragan, pp. 304–7.

10 Cf. Harold Courlander, *Negro Folk Music, U.S.A.* (New York: Columbia UP, 1963), p. 42.